

---

# 冒険者の心得その1生きるべし！

三步

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

冒険者の心得その1生きるべし！

### 【Nコード】

N6066X

### 【作者名】

三步

### 【あらすじ】

ケインとラルゴ、神様から”アビリティ”と呼ばれる特殊な力を授かったことで、冒険者として生きていく道をえらんだ2人の少年達の友情物語。

自分の限界を決めてしまわないで、突き進む少年を描いた冒険活劇を目指します。

初投稿です。1話ごと短めに書いてく予定です。常にハッピーエンドを目指します。

## ケインのキラいな日(1)

新しい年を祝う祭りで、村の広場は賑わいをみせている。あちらこちらで大人達も子供達も楽しそうにしているのが．．．ケインにはなんとなく面白くなかった。ケインはその日が嫌いだった。

この世界”アートフィル”では神々や精霊が新年を祝うこの日に特別な”何か”をプレゼントしてくれる、と言われている。誰に何をくれるかはよく判らないらしい。しかし、何かを授けてくれるのは決して嘘ではない。この村にも1人授かった者がいるのだから。その人は小柄な女性だが、村一番の力持ちだ。

「よう、ケイン。お前は食わないのか？」

後ろから声がかかった。振り向くと自分と同年のラルゴが焼き鳥の串を数本持つて近づいて来た。一本をケインに差し出す。

「サンキュー、ラル。」

串にむしゃぶりつく、村特性のタレがなかなかだ。ラルゴは亜麻色の髪をしている。甘いマスクと人懐っこい性格で同年代の女子からおばちゃん達にまで人気がある。ケインは黒に近い灰色の髪で顔は悪くない方だと思っているが、女子にはさっぱり縁がない。ラルゴ曰く、「目じから」がハンパでないとのこと。ようするに目つきが悪いということなのだろう。

「今年こそ、”アビリティ”貰えるかな？15歳で貰えるとすんごいらしいからな、俺たちスペシャルイヤーだよな、今年は。」

”アビリティ”とは神々などから授かる力の通称である。そしてラルゴが言ったことこそがケインがこの日を嫌っている原因であった。

## ケインのクライな日(2)

「神様もラルになら今年はくれるかもな。」

出来るだけ、出来るだけ感心が無い風を装い返事を返す。しかし、付き合いの長いラルゴには無駄のようで少し意地悪な、それでいて人懐っこい笑みを浮かべて、

「強くなりたいんじゃない無かったのかい？」

さらりと、直球ど真ん中ストレートに聞いて来た。

そう、ケインは強くなりたかった。だが、それを神頼みにして安易に手に入れることを願う自分を嫌悪していたのである。今日という日は己の力のなさ、心の弱さを最も強く感じてしまう日なのである。

「そりゃそうだけど…ってラル？」

こいつ相手に強がっても無駄だと返事を返そうとしたそのとき、ラルゴの体に異変が起こるのが目に入った。そして同時に、ケインも自分の体に異変を感じた。

## ケインのキラйна日(2) (後書き)

iphone用キーボードゲットしました…

### ケインのクライな日(3)

何が起こっている！

ケインは地面にうずくまっってしまった。いうことを聞かない身体を懸命に動かそうとする。まるで金縛りにあっているように自由にならない。玉の汗が全身に浮かび下を向いている顔のあちこちから滴り落ちるのを感じた。

と、頭の中に大きな声が鳴り響いた。

(先に見つけたのは私よ！)

(早い者勝ちだろ！先に印付けてやるぜ？)

(…まーまー、落ち着いて。取りっこよりわけっこの方が楽しいよ)。)

(…その手があつたか？)

(冗談だったんだけど…まあいいか、…じゃ僕も。僕はこっちのにするね。)

おーい、あんた達コッチのこと考えてないでしょう？と、つつ込む前に意識が遠のいてきた…。

-----

(?…僕は?)

一瞬、今どこで何をしていたのか記憶が途切れていて理解できなかった。

周りを見回すと、新年を祝う祭りの景色が目に入り、和やかな賑わいに満ちているのが確認できた。

(さつきからほとんど時間が経っていない…みたい。)

今度は体を確認するが全く変わった様子は無い。

「そつだ！、ラル？」

ラルゴが膝をつくのを見た記憶がかすかにある。思わず叫んで周り

を見渡すと、すぐ近くに大きな犬がいた。

その犬は亜麻色の毛並みが美しい大型の犬で、昔ラルゴの家で飼っていた犬にそっくりであった。ただしその顔というか、瞳に見覚えがあった。

「…お前さん、もしかしてラル？」

間違えていたら恥ずかしかったので小声で話しかけると、

「ワン！」

としつかりした鳴き声が返ってきた。

「犬でもイケメンか…、あ、犬だからイケワンか。」

僕の軽口に、何を思ったかラルゴ（犬）はのしかかって来た。

その瞬間、全ての時間の流れが遅くなったような気がした。いや、明らかに遅く感じる。そして、ラルゴ（犬）を軽くかわす。

着地したラルゴ（犬）が不思議そうに首をかしげた…。

「どうやら、お互い神様達から力を授かって、…アビリティ持ちになったようだね。」

「ワン！」

一鳴きしてラルゴ（犬）が頷いた。

## ラルゴの尊敬する友人

新年を祝うお祭りが終わり、村がまた普段の装いを取り戻しつつある、そんなある日、ラルゴは村長の家にいた。

あの後、苦勞してなんとか人間の姿に戻ることができた。そしてアビリティのことをケインと相談し、まず家族に打ち明け、それからアビリティについて教えを乞うためサラさんのところに話をしにいった、なぜなら、サラさんは村唯一のアビリティ持ちであるから。サラさんから、このことは村全体に関わることだからと村長に報告した方がよいと言われ、村長宅で関係者を集めて話し合うこととなった。

ケインの家からは母親と兄が、ラルゴの家からは両親が、それに村長とサラさんが同席している。

村長（昔から名前と呼ばれているところを聞いたことがないので名前を知らない）はラルゴの知らない話をたくさんしてくれた。

この村にもう少ししたら王国官僚（今でいう国家公務員のこと）が来て年に1度の視察を行うこと。作物の出来柄や村の税金の使い道とか、いろいろと調べられること。その時、村にはアビリティのことを報告する義務があること（というかそのために新年の祭りの後にくるようになっていたらしい）。

「つまり、王国に2人のことを報告しなければいけないのです。そして2人は王都に赴いてアビリティについて詳しく調べられると思います。」

長い話のため村長が大きく息を乱して話が中断したのを見計らってサラさんが一番大事なことを伝えてくれた。

「ここは王直轄の村なので、2人とも将来的には王国に仕えるように言われると思います。と言っても、いきなりではなくまず冒険者を勧められるようです。その功績や行動、アビリティの内容によって王国のスカウトの選択肢が決まるようです。また、アビリティ持

ちは冒険者になっても外国には出国出来ません。ちなみに私は冒険者にも王国へ仕えることもしませんでした…私は戦うことが怖かったから。そのため、村へ帰ることを認めてもらえましたが、この村から外へ出ることは禁じられました。このことは村の人は誰も知りません…。」

サラさんは、どこか怯えたように話してくれました。どうも、王国はアビリティ持ちに敏感のようだ。

それはそうだろうとラルゴは思う。例えば、自分のアビリティは”チェンジアニマル（動物変身）”らしいが、それを上手く使えばかなりすごいことが出来ると思う。

ケインの母親と兄はかなり真剣に聞き入っているし、質問もしている。ケインは家を継ぐことが無い立場なので、元々大きな街にでも出て身を立てることを視野に入れていたみたいだ。ケインが王国に雇われるなら文句は言わない、というより喜ぶであろう。ただ、ケインはこの村に愛着を持っている。彼の父親はモンスターの襲撃から村と家族を守るために命を落としている。直接本人から聞いたわけではないが、ケインが強さを求める理由の一つだろう。どうするつもりかな？

ケインは家族よりずいぶんとのんきな顔をしている。もう、これからどうするかを心に決めているのだろう。普段は好きなクッキーとプリンをどちらから食べようか悩むようなヘタレだが、時々信じられないほど決断力を見せる。

（あの押しの強さを何故、ガールフレンドを作る事に使えないのか…。）  
ふとケインと目が合った。不埒な事を考えていたのをばれないで欲しいと思う。あいつはそこらへん異様に鋭いからなと心で考えていると、

「ラルのとおちゃん、ラルはどうするつもり？…ラルが冒険者になるなら僕が守るよ。」

いきなり我が家の今一番の問題に触れてくれやがった。ラルゴは長

男で跡取り、しかもラルゴの家はこの村最大の農場と農作業者を抱えており実質的な支配者ともいえる存在であった。ちなみに村長は行商をしていたこともあり村の外の事情もよく知っており顔もきくため村長をしている、いわゆる顔役である。

ラルゴの父親は少しの間、難しい顔で黙っていたが、

「王国に属する身分である以上、ラルゴのことで何かを言われたら王国の指示に逆らう事はできない。…だが、…出来れば冒険者になつて認められる功績を立てた後は、王国に顔が利く身分で村に帰つて来て欲しい…。」

ラルゴの家にとっては確かに理想的だ。

（現実派の我が親父殿にしては希望的要素が随分強いし、不明確な要素が多すぎる、イマイチだな。）

ラルゴとしてもそうありたいが、あまり時間がかかるようでは弟に悪い。

「ラルゴの弟もシツカリしてるからさ、どちらが後をついででもいいようにシツカリ決め事をしとくのがいいんじゃない？こいつはラルゴのためを思つて言ってるんじゃない、正直、この村に憂を残して出て行きたく無いんです。人の家の話に口出しして悪いけどさ、…もう戻ってくる事ないと思うから。」

ケインは、我が家の、つまり村の大問題を…分かっていてもラルゴの父親が言えなかったことをアツサリと言いつつ切った。

（相変わらず決断力がすつ飛んでいるよカイン、俺はもし親父殿のようにリーダーを任される立場に着いたなら間違いなくお前を手本にするよ。）

ラルゴもこれから自分がどうするかを、全力で決断したいと思った。

ラルゴの尊敬する友人（後書き）

ラルゴはケインをかなり買いかぶっています（笑）

えっ？テストでデットorアライブですか？（1）

王都に近いある森の中、3人の人間が地面に空いた入り口の奥、階段の先の暗闇を見つめていた。

1人は灰色の髪のカイン、その右横に亜麻色の髪をしたラルゴ、左横のもう一人は金髪の女性である。女性は緑眼で背もスラリと高く胸もある。顔も美しく妖精族なのではとうたぐってしまうが耳はとんがっていない。

（まあ、年齢は俺たちより…）

カインがそこまで考えた瞬間げんこつが落ちて来た。

「…今、私にとって不愉快なことを考えていたな。」

痛む頭をお抑えながらこの人は絶対読心術のアビリティを持っていると心の中で呟いた。

「ケインお前、女性にそんな視線向けたんじゃ…バレバレなんだよな。まずはタチアナさんに謝れよ。」

女性慣れしているラルゴがフォローを入れる。

「でもラル！痛い思いをしたのはコツチの方なんだよ！なんで僕が…ゴメンなさい。」

タチアナの絶対零度の視線を浴びているのに気付き、完全降伏する。「…とにかく、もう一度確認のために言うておく。このダンジョンはモンスターの駆除が終わったばかりだから、まだ集団で襲われる確率は少ない。マップチェンジも先月したばかりだし、大体1階層しか無いのだから1日で攻略できる。まさに卒業テストにはふさわしいダンジョンだ。存分にアビリティをチェックしてくるがいい。だが、くれぐれも油断するな。このモンスターは弱いパペット（人形）しか出てこないとはいえ、初心者のお前達の方が間違いない弱いのだから…」

タチアナはラルゴには微笑んで、ケインには氷の視線を向けてこの卒業テストの内容を伝えて来た。

王都に呼ばれて1月の間、2人は戦闘技術や歴史などの学問、そしてアビリティについて学んだ。

タチアナは今回2人の師匠役を任された紋様術師である。アビリティ持ちにはその能力を高めるための紋様を体に描く。ケインとラルゴの2人に紋様を描き、その能力の解析と強化を行ったのはタチアナである。

当然アビリティについても調査した。ラルゴは予想通り”チェンジアニマル（動物変身）”であった。カインは”ブースト（身体能力強化）”…らしい。

カインの方を断言できないのは、色々とあつて、体に紋様を上手く描けなかったせいである。

この1ヶ月で2人もある程度アビリティを使いこなすことが出来るようになっていた。今回はそれを実践で試すわけである。

「ではタチアナさん、行って来ます。」

「死なないようにガンバってくるよ。」

2人はタチアナに挨拶をして階段を降りていった。

「…ハーティア、いるわよね。」

「三步後ろにいます。」

タチアナの小さな声に返事があつた。

「隠れてサポートをお願い。生かさず殺さず、死にそうにならない限り手を貸さなくていいわ。それよりケインのアビリティの観察をお願い、今まで見た紋様のどれよりも解析が難しいの。」

紋様は元々ある印のようなモノを筆に付けた特殊なインクでなぞることです浮かび上がる。

ずっと昔から紋様とその発現される能力を記録して来たことで、今日はかなりの高確率でアビリティを言い当てる事が出来る。だがまったくの新種のアビリティは理解不能な事が多い。そのためにも今回は特別にダンジョンまで用意して”姿隠し”のアビリティを持つハーティアを呼び寄せたのである。

「この迷宮のあれは…2人にはまだ教えてないんですよ。サポ

「トが間に合わず死ぬかもしれないよ？」

「構わん、データが取れば元は取れる。」

「…分かりました、それでは追跡を開始します。」

ダンジョンに入りながらハーティアは心の中で2人を無事帰還させることを誓った。彼もまた1人のアビリティ持ちなのであるから。

えっ？テストでデットorアライブですか？(2)

ケインとラルゴは薄暗いダンジョンの中をゆっくりと進んでいた。「灯りが要らないのは助かるよな。」

「まっただくだね。」

ラルゴの漏らした言葉にケインは前を見ながら同意の意見を返す。人工ダンジョン（迷宮）は天井面が発光していて、灯りが要らないと説明を受けている。しかし、トラップ（罠）が発動して消えてしまっこともあるらしい。このダンジョンにはいるに当たり、2人が先ず覚えさせられたことは、目隠ししての灯りの起こし方であった。装備に関していえば、2人とも貸与された皮鎧と硬帽子、棍棒（松明にもなる）、これに予備の短剣を腰に付けている。このダンジョンに出現するモンスターのパペット（人形）は石のような材質で出来ているらしく刃物はあまり役に立たないと聞いている。

2人ともモンスターと戦った経験はない。しかし、野生の獣と戦うことはよくあった。村に野生の獣が現れ作物を襲うことが少なく無かったのだ。特に多かったのがスキンヘッド猪で、畑の作物を我が物顔で食い散らかす上に、近づくと突進して来て相手を吹き飛ばす厄介な相手だった。村の男衆総出で退治することもしばしばあった。ラルゴはあまりそういうことの前面に出されることは少なかったが、ケインはよく前に出た。弓や槍で小物を仕留めたこともある。

ただ、稽古をつけてくれた騎士さん曰くラルゴの方が逸材らしい。ケインでは練習試合で全く触れることのできなかつた騎士からラルゴは綺麗な一本を取ったのだ。

（僕は、この先こういう仕事で生きていけるのだろうか？）

ケインは自分の実力不足を感じると落ち込んでしまっタイプで、今も前を向いてはいるうちにいつも間にか俯いている自分に気がついてまた落ち込んでしまっことを繰り返していた。

「ケイン、あれっ！」

ラルゴの警戒の声で集中力を取り戻す。少し前方の床面の一部が発光している。そこから、ゆっくりと人型のモンスターがせり出してくる。

そのとき、モンスターの頭に握り拳大の石が飛んで行った。しかし、ぶつかると直前に弾かれパコツと軽い音がした。

「…やっぱり発光が収まるまでは攻撃は効かないんだな、つよつよ！」

ケインは発光が収まるのを見計らって、もう一度石を投げつけた。

「いつの間にも用意したんだよ…そんなの。」

「迷宮に来る途中で、2、3個ね。一応確認だよ、実際効かなかつたし。来るよ。」

2個目の石は胸にぶつかつたがたいして効いていないようだ…。

さあ、始めてのアビリティバトルだ！ケインは気合のこもつた声を発しモンスターに突っ込んでいった。

えっ？テストでデットorアライブですか？(3)(前書き)

設定を修正しました。

粘土細工のように潰れた 陶器のように砕けた

えっ？テストでデットorアライブですか？(3)

モンスターは人型を取ってはいるが全く生命を感じさせない動きをして向かって来た。

パペットと呼ばれるこのモンスターはダンジョンによってかなり違いがあると教えられた。

今向かって来るパペットは大人の大きさほどで2人よりも背が高い。身体つきは細身だが、腕の長さが肩から膝まであり異様に長くみえる。体の表面は茶色で光沢があり天井から発せられている灯りを照り返して正直不気味だ。顔はのっぺりとしていて表情はなく真ん中に赤く光る石のようなモノが埋まっている。

「アビリティ発動！」

突進しながらケインは大きな声を上げた。紋様術によって描かれたラインが紫色に輝き浮かび上がる。ケインは顔や瞳にまで紋様を施されているので、ラルゴには迫力あるし目立つね〜と笑われたが。ちなみかけ声は発しなくてもよいのだが、初心者のうちには発動のイメージを固定するためにするように指導されている。

パペットは両腕をでんでん太鼓のように振り回して来た。

かなりの加速を伴って自分に向かって来るソレを…ケインは世界がゆっくりになるのを感じながらじっくり観察した。

(…関節は無い…前腕は硬そうで手のひらはなく指？いや爪が手首の辺りから直接生えている…上腕は太いゴムひものような感じかな、伸びるだろうから注意しよう)

旋回する両手を回避して懐に飛び込む。タチアナからゆっくり感じるのは身体能力が上昇し加速しているからだと言われた。

(狙いは足首！)

思いっきり棍棒を振り下ろす。

両手による旋回攻撃のため足を踏ん張っているのを観察していたのでここを傷めれば旋回攻撃ができないと踏んだからだ。

案の定、パペットはバランスを崩して次の旋回攻撃に移れない。

同じくアビリティを発動させたラルゴが、ここぞとばかりに棍棒を振りかぶって跳躍した。パペットはケインを無視して片腕を前方のラルゴにつき出そうとしてた。

(…相打ちくらいのタイミング、被害はラルの方が大きい、…やらせない！)

一瞬でパペットの側面に回り込み棍棒で腕を突く。止めることはできないが、攻撃方向を狂わせることに成功した。ラルゴの渾身一撃が振り落ろされる！

がきん、といい音がしてパペットの頭部が陶器のように砕けた。

崩れ落ち、完全に動かなくなったこと確認して2人は歓声を挙げた。

えっ？テストでデットorアライブですか？(4)

「しかし、”その限定発動”って便利だね。」

パペットを倒し、2人は背中合わせで座りながら水筒の水を飲みながら反省会をしていた。

ケインはラルゴのアビリティ”アニマルチェンジ”による跳躍は自分のアビリティ”ブースト”より勢いがあつたように感じた。ただし、動物の姿になっていたわけではない。

「タチアナさんがアビリティは型が決まっているわけではないから、自由な発想で使えっついでたからさ。まっなんとなくできるかなって練習してたら、…なんかちやうもんだよな、…アビリティってオモシロいな。」

”アニマルチェンジ”は自分がよく知つた動物にしか変身できないらしい。アビリティは総じてイメージが大事なようでラルゴはまだ昔飼っていた犬にしか変身出来ない。タチアナさんの特訓で本物を見ながらなら猫に変身出来るようになってはいたが、それ以外はただ無理だつた。

また、犬の身体能力は人間より優っているところは多いものの、戦闘に関してだけいえば武器や防具を使える人間の姿の方が有利なことも多い。なら変身しないで動物の能力だけを発現出来ないかって考えたらしい。

「ラルのあの動きを見て、タチアナさんが一番驚いていたのは笑えたよな。」

「…はは、でも普通に発動するよりも効果が出るまですこし時間がかかるのがネックだな。正直、同じタイミングだったらケインならたくさん攻撃できるし。」

「うん、…それで…別の話がいんだけど…僕の動き、おかしくない？」

「どこが？」

「って、自分でわかんないから聞いてるんだってば。」

「わけ分からん、…もう少し説明しろよ。」

ケインは少し迷いながら、

「僕のアビリティは”ブースト”っぽいつて言われてるじゃない？ただ、過去の記録を見してもらったけど、なんか違うような気がする。どっちかっていうと”ヘイスト（加速）”に近い気がするんだ。」

「でも、ヘイストはほとんど筋力は上がらないって話したろ。その話、タチアナさんも調べてくれるって言うってたじゃないか。」

「…そうなんだけど、…ラル、実はタチアナさんに話してないことがあるんだ。」

「…わかった、話してみるよ。」

一旦、周りを見渡してパペットが湧いてきていないのを再確認してからケインはアビリティ獲得のときの自分の頭の中に響いた”誰か達”の会話のことを話した。

「…ってことは、2人の神様にアビリティ貰ったってことか？」

「…多分。」

「まあ、それじゃ気になるよな。…うーん、たしかに言われてみると…ときどきケインの姿が見えなくなる気がする。早くて目で動きが追えないだけなのかもしれないけど。」

「そうか…ありがと。あと、ラルの方も気になるんだ。」

「は？」

「僕はラルが倒れるのを見てから、自分の身体に異変を感じたんだ。あの人達の会話から感じて3人目の人ってラルにアビリティを授けたっぽいんだけど。ラルが倒れた原因がアビリティ獲得なら、ラルも…。」

「じゃ、なにか。俺も2つアビリティ貰ったってことか？」

「正直あの時、頭の中がぐるぐるしてたから、本当にそんな会話が有ったかも自信無いんだ。」

「…まあ、いい方に考えるよ。2つアビリティ貰ったかもしれない

なんてすごくないか？ウルトララッキーだよ。たてえそうでなくても損はしてないし。」

ケインはラルゴのこんなところを羨ましいと思っているが、絶対言わないようにしている。そんなことをいえばお互い恥ずかしくなるだけだ。

「…だな、そろそろ探索を再開しようか。」

「OK」

「それと、さっきのパペットへの攻撃、あれやめろよ。」

「なんで？」

「おお振りで、隙が大きすぎる。僕が攻撃を逸らさなければ大変なことになってたよ。」

「…結果オーライで、いいだろ。」

ケインはここでラルゴの声が少し変わっていたことを、怒っていたことを気付けなかった。そのことを後になって随分後悔することになる。

えっ？テストでデットorアライブですか？(5)

「アビリティ発動！発動！もっと早く動け！自分！」

焦りと混乱で息が苦しい。パペットの攻撃をかわしてから一気に距離を取る。パペットと同質と思われる障害物に身を隠して、様子を伺いながら息を整える。

（さっきラルと倒したパペットよりずっと強い！…ラル、死ぬなよ。）

ラルゴがいると思われる壁の向こう側をチラリと見ながら親友の身を心配する、そして打開策を見出す為に先ほど起こったことを思い出す…。

—————

「結果オーライじゃあいくつ命があっても足りないよ。」

ラルゴの行き当たりばつたりの考えを否定する。

「そもそもラルは基本家に帰ることを視野にいれているんだからもつと慎重に動けよ。」

「家は関係ないだろ！！お前何様のつもりだ！！」

もの凄い怒鳴り声が帰ってきてケインは正直びっくりした。

「…そうだ、アレだろ。初モンスターを俺が倒したんで嫉妬してるんだろ。みつともない！」

「はあ？そんなわけないだろ！」

「いや、お前はそんなやつだね、前にミーナちゃんにお前が告白しようとしたとき、呼び出した俺にミーナちゃんが告白してきたからむっちゃ嫉妬してたじゃん。」

「それこそ今、思いつきりカンケーないだろ！ラルは後先考えなさすぎな上にジコチューだよ。」

「だーかーらーっ(？)」

ラルゴがさらに何かを言い返そうとしたそのとき、2人の間にポンという音とともに白い煙があがり、煙の消えた場所に1人の子供が立っていた。

その姿は、美しいの一言に尽きた。性別や年齢を超越した存在に思えた…神だと言われればそのまま信じたと思う。

「とりあえずわかったから。全て僕に任せて！ゲームで解決しよう。」

「全くわけの分からないことを言われました…」。

えっ？テストでデットorアライブですか？(6)

「ぼくの話はGMってよんで。ルールをせつめいするね、いまからこのだんじょんふいーるどを2つにわけてそれぞれ1たいずつパペットをよういするから。さきにたおしたほうがかち！しつもんはないね」

ニツコリと笑いながら神？のような子供は一方的に説明を始めた。そしていきなりケインの方を指差して、

「…と、そのまえにきみはジャマだからたいしゅつ」  
「ポン？と音がして振り返ると、ケインの後ろ三步ほどの位置に煙が上がったのがみえた。」

「今誰かの人影がチラツと見えたぜ。」

見える位置にいたラルゴがケインに説明した。

「じゃ、よういするね」

と言って子供がポン？と煙になって消えた。

静まり返った空間で2人は目を合わせた。鏡で見れば、今の困惑した顔はお互いそっくりだろうと思った。

やがて、フロア全体が大きな音お立て始めた。一番外側の壁以外、壁という壁が床面に吸い込まれてなくなる。あちこちにパペットが見えたが皆、出現したときと逆に床面に沈んでいった。

もの凄い広い空間ができあがったと思ったら、今度は逆に床から50センチ角のキューブ（立方体）がドンドンとせり上がって来た。空間を2分する壁とランダムな位置に小山（こちらは適度に配置された障害物だと思う）が出来上がって来た。

「うわ？」

いきなりケインは煙に包まれ、気が付くと見たことの無い場所に立っていた。4つある壁面の1つがキューブで、今まさに完成しつつあった。

（反対側に転移させられた？アビリティ！ダメだ間に合わない！）

全力で向かうものの、壁に到着する直前に完成してしまった。

(じゃ、スタート)

どこからか声が聞こえた直後、床の一部が発光し始めた。先程倒したパペットが現れたときよりはるかに大きな範囲が…。

(さいごにルールのせつめいをもうひとつ、さきにたおしたパペットのところだけ、ちじょうへのかいだんをよういするからね)

「ッ！ラルー！！」

ケインは向こうに聞こえないと、届かないと思っても、叫ばなければいけない気持ちだった。

えっ？テストでデットorアライブですか？（7）

ラルゴはパペットがいる場所から随分離れた場所で寝転んでいた。ゲームが始まってからすぐの攻防で棍棒は折れてしまっていた。犬に変身して駆け回って今に至る。

（隠れ鬼ごっこは卒業したつもりだったんだけどな。）  
案外平気でいる自分に驚きを感じている…。

（バカケインはこいつを倒せるかな。）  
時々、近づいて短剣で攻撃したが（アビリティで変身すると、服とか身につけているものも取り込んで変身することができる。意識しないと出来ない）、まだときどき失敗して人間に戻るときに裸になってしまうこともあるが）全く効かなかった。

武器のいらぬ、それでいて攻撃力のある限定発動アビリティも覚えればよかったと思う。たとえばゴリラの力だったらこのキューブ投げれたかもしれない。

（まあ猫で手こずってるんじゃ、他の動物では無理すぎるけど。）  
幸いなことに背の低い犬にとって50cm角のキューブは視線を遮るいい障害物だった。キューブは高いところで3段（計1.5m）まで積み上がっている。

（…ケインならこの状況どうするかな？あいつだけでも地上に脱出してほしいけど。）

最もあいつは1人で出ようとしないんだろうけども思っていたときいきなり壁が…4つの壁で出来ている四角い空間の1つの壁、キューブが積み上がって出来たものが大きな音とともに弾け飛んだ。キューブ縦横2つづつ計4個分がこちら側に押し出されるかたちになりその分だるま落としの要領でキューブが下に落ちた。当然、天井に近い最上部に穴の空いた空間ができる。

ラルゴは笑いながらそこを見上げていた。  
（あいつらしいや。）

すぐにそこには彼が、  
∴ 先程バカ呼ばわりした親友が現れた。

えっ？テストでデットorアライブですか？(7) (後書き)

次で戦闘は終わらせたいです。

えっ？テストでデットorアライブですか？(8)

ケインは素早くあたりを見渡して、パペットと、ラルゴ(犬)の位置を把握した。結構な高さをひらりと降りる。そして一気にダッシュしてラルゴのところまでかけよる。

「壁から離れて！」

注意してから振り返ると、轟音が鳴り響いてキューブの壁が崩れパペットが現れた。

「無事でなによりだけど、出来ればあれを連れて来て欲しく無かったよ。」

「壁を壊してくれたからもう用無し！！ラルかたずけて。」

「俺か！しかも2体！」

「無理？」

「むりむり。」

「じゃ、2体2で……」

ケインはパペットから距離を取るために、走りながら幾つか策を話した。

「OK！アビリティ発動！」

ラルゴは犬に変身してパペットの1体に向かう。

パペットは2人で倒したものより頭1つ分大きいし速さもある、力の強さは見ても通り重いキューブを軽く殴り飛ばす。かたちの違いは腕のさが爪のようなものではなくってトゲトゲのある鉄球とぐらいだ。腕は振り回すより直線上に射出することが多い(チェーン付きで巻き戻される)。

(僕達に戦闘技術はない！けど！)

1体のパペットに向かい攻撃を交わしてすり抜け、ラルゴを追いまわすもう1体に近づく。ケインに誘導されたパペットが追いかけてくる。ラルゴもケインの方に向かってきて、2体のパペットが同時に鉄球を射出する！

(今！)

いまから行おうとすることを強くイメージする。

(アビリティ全開！！)

自分に向かいくる鉄球を棍棒で打ち付けて軌道修正し、ラルゴに向かう鉄球に回り込む。

犬のラルゴに向かつて打ち出された鉄球の軌道は下向きのため先程より強く打たなければならない。

(いけー！ホームラン！)

かきーんと金属バットのよう乾いた金属音を残して鉄球はパペツトの方に向かう。

見事命中！2体とも胸に大きな穴が空いてズシンと大きな音を立てて倒れた…。

「ういなー…ええとにんげんのほう！…たぶん。」

…随分と大雑把な勝利宣言が聞こえた。

えっ？テストでデットorアライブですか？（9）

「よくせいかいをえらべたね」

何時の間にかケインのすぐそばにいたGMはパチパチと拍手を送ってきた。

さつきは神々しい感じがしたが今はイタズラっ子にしかみえない。

「パペットとおなじいろにしたし、キューブのかべもつみあがるのもみせたから、だぶんだいじょうぶだとおもったけど」

「大丈夫なわけ…」

反論する前にGMはポン？と音を立てて消えた。

（しょうひんは、パペットのためのほうせき、いいねで売れるよ。あと、ポーナスあげるね きみたちのアビリティは2つだよ。）

床面から階段がせり上がってきた。天井面の一部から外の明かりが見えた。

（たのしかったよ、またあそぼうね）

「…一方的になやつだったね。」

「ホント、正直もう会いたくないぜ。」

2人で宝石をパペットの顔から穿り出す作業をしていると、

「ケイン、あのさ、最初のパペットを倒したとき、俺が無茶したのは、…お前がなんとかしてくれてるって思ったからだ。」

ラルゴがいつになく素直な口調で話しかけてきた。

「…きずかなくてゴメン。…僕もさラルを信じることにするよ。」

このときケインは生き残ったことより、なぜか、”生きていること”がとても嬉しかった。

## タチアナ史上最大の屈辱

ケイン達の騒動があった日から数日後、術師会館の比較的簡素な部屋にタチアナはいた。

今回の顛末の報告、というより査問会である…。よくつもまあ長老達がこれだけ集まったものだ。とタチアナは驚いた。

（いくら私が王国一の美貌の持ち主だといっても、…みんな暇なのね。）

やがて、最長老が声をかけて来た。

「さて、タチアナくん。こつちへ来てくれるかな。」

長老達の席の近く、対面する位置に椅子がある。

タチアナは礼もせず、そこに座る。その態度に長老達から不満の声がかかる。

（いびりたければいくらでもしなさいよ。）

タチアナはここにいる誰にも頭を下げたく無かった。

「ただの報告会だ、堅苦しくする必要はないよ。」

ほとんど会ったことが無いのでよく知らなかったが、最長老はどうやら話のわかる人物のようだ。

「じゃあ、始めよう。…今回の件の報告書はもらっている。新種のアブリテイの調査のため、高い金を払ってダンジョンを用意した、

Aランクの冒険者も雇った。

だが、結果として調査は失敗した、

ダンジョンは今侵入不可能だと。

…これで間違いないね。」

「…はい。」

拍子抜けするほどは話しが早い…。これならすぐ終わるかもとタチアナは少し期待した。

失敗というより言葉に反応してか、また長老達から不満の声が上がったりしてザワザワし始めたが、最長老は手を上げてそれを制した。

そして、ここからタチアナにとっては予期しない展開になった。

「タチアナ君に落ち度はないから特に懲罰はなしだよ。…ただ、調査からは外れてもらうね、師匠役も終わりだ。」

「了承しました。」

「じゃあ、その件は終わりにしよう。」

あまりにも甘い裁定と早い査問の終わりに返って戸惑ってしまった。

「じゃあ、タチアナ君はこちらに座り直して。」

長老達の席のはじっこ、つまり末席を指してそこに座るようにタチアナに指示がでた。

(…目的は何？これから何が始まるのかしら?)

「じゃあ、ハーティア君が入って。」

扉から入ってくるハーティアに、今回雇っていた姿隠しのアビリテイを持つ男に視線を送る。

「わざわざ来てもらって済まないね。」

「お気になさらず、上司が最長老によるしくとっております。」  
ハーティアが挨拶を返す。

「皆に説明しておこう。彼は私の知り合いの配下で冒険者だ。タチアナ君の要望に彼を押ししたのは、その私の知り合いが信用が置ける人物だと推薦してくれたからだ。」

周りの反応を確認するように少し間を置いて

「…今回は彼の上司が私に気を利かせてくれてね、面白い話を持って来てくれた。ハーティア君、君の口から報告してもらえるかな。」

「はい、…今回の依頼はアビリテイ持ちのケインとラルゴの2人を監視して、新しいアビリテイの情報を得ることでした。結果的にそちらはなにも得られませんでした。」

しかし、2人は面白いことを話していました。」

タチアナは自分の方をみようともしないハーティアの話っぷりに、自分に不利になる話が始まるのだらうと予想し…的中した。

「2人ともマルチアビリテイ持ちの可能性がありません。」

ハーティアが2人の会話を再現するように話しながら報告すると、

部屋の中はどよめきに包まれた。

2つ以上のアビリティを持つ者をマルチアビリティ持ちという。非常に珍しいケースな上に、1度に2人ともなると前例がない。

このとき、最長老の視線にタチアナは気がついた、そして意図するところも。

「非常に興味深いことで、これから追跡調査が必要になる。

だが、残念なことにタチアナ君が今、それを外れたために後任を決めなければならぬ…さてどうしたものか。」

(…私から2人を取り上げて、…これほどのサンプルを奪って、それを誰が研究するのか決める席に私を座らせて！

これが本当の罰なのね、なんていやらしい。)

心の中で、タチアナ史上過去最大級の憎悪が渦巻いたが表情には出さない。そんなことをすれば最長老を喜ばすだけだ。

その後、タチアナは一言も発言することもなく、ただ椅子に座ってこの拷問が終わるのを待った。

## ララカルの街にて…冒険者業に就職(1)

王都からさほど離れていない位置にララカルという街がある。海に近く、山も近く、農作も盛んで、工業地帯もある上、温暖な気候で観光スポットとしても人気がある街である。

(…つまり冒険者としては、仕事が多くて理想的だよな。)

ケインはラルゴと繁華街を歩きながらそんなことを考えていた。

「ねえ、ハーティアさん、あそこは？」

「ああ、この辺では有名なお菓子のお店だね…」

ラルゴが案内をしてくれるハーティアさんに気になる看板、お店、服装など様々な質問を浴びせていた。ハーティアさんもいちいちそれに付き合っつて説明してくれる。

(やめてくれよ…田舎者丸出しだよ…。)

王都での訓練を終えて、2人は王国の官僚から、暫く冒険者をすることを進められた。特に強力なアビリティ持ちはそのまま王国に雇われる(いままでいうと公務員になるってこと)こともあるそうだが、ケースとしては少ないらしい。返って気楽でいいとケインは思う。タチアナさんとはケインはなぜか王都を出ることが決まっつてから会うことができなかつた。苦手としていたので積極的に会いたい相手ではないがお礼くらいは言いたかつた。一応手紙は置いて来たが。ラルゴも出発前日に1度だけ話せただけだといつていた。

今回はハーティアさんという先輩冒険者が相談役として自分達に配置された。冒険者として拠点となる街を決め、冒険者として生活する場所となるパーティーハウス(通常ハウスと呼ばれている)を紹介し、冒険者として登録してファーストミッションをこなすまで面倒を見てくれる、そんな役を彼は王国から受けているとのことだ。

「もうすぐ1件目のパーティーハウスに着くからね、さっき言つたとおりまず筆記と面接が絶対あるよ。」

因みに私は外で待っているからね、私と一緒にいると判断力や決

断力がない人物だと判定されるんだ。緊張しなくていいから頑張っておいで。」

（うう、そんなこと言われると余計に緊張するじゃん。）

ケインはそういうプレッシャーにいつも全然動じないラルゴが羨ましいと思う。

やがて、案内された建物の前でハーティアさんと別れ2人は中に入っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6066x/>

---

冒険者の心得その1生きるべし！

2011年10月19日08時05分発行